

伏見城跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一九―九

伏見城跡

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

伏見城跡

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、JR奈良線路盤新設工事に伴う伏見城跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

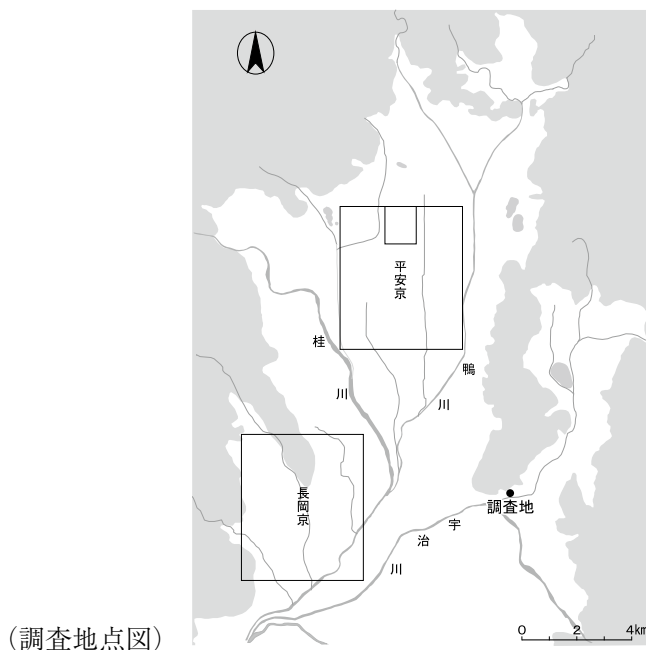
令和2年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 伏見城跡（京都市番号 16 F 293）
- 2 調査所在地 京都市伏見区桃山町伊庭地内
- 3 委 託 者 西松建設株式会社西日本支社 常務執行役員 支社長 酒井祥三
- 4 調査期間 東調査区：2019年4月22日～2019年4月23日
西調査区：2019年11月19日～2019年11月20日
- 5 調査面積 東調査区：5.5㎡、西調査区5.25㎡
- 6 調査担当者 上村和直・津々池惣一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「桃山」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付した。
- 13 本書作成 上村和直
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	2
2. 位置と環境	4
(1) 調査地の環境	4
(2) 既往の調査	4
3. 遺 構	5
(1) 東調査区	5
(2) 西調査区	6
4. 遺 物	8
(1) 遺物の概要	8
(2) 瓦類	8
(3) 土器類	8
5. ま と め	9
(1) 検出遺構について	9
(2) 木幡山伏見城舟入について	9

図 版 目 次

図版1	遺構	1	東調査区全景（東から）
		2	東調査区北西壁断面（南東から）
図版2	遺構	1	西調査区全景（北から）
		2	西調査区南東壁断面（北西から）

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	東調査区調査前全景（南西から）	2
図3	東調査区調査状況（北東から）	2
図4	西調査区調査前全景（北東から）	2
図5	西調査区調査状況（南西から）	2
図6	東調査区配置図（1：200）	3
図7	西調査区配置図（1：200）	3
図8	東調査区遺構実測図（1：40）	5
図9	西調査区遺構実測図（1：40）	7
図10	出土遺物拓影及び実測図（1：4）	8
図11	『伏見城御城郭并屋敷取之繪圖』〔京都市歴史資料館蔵〕（部分）	10
図12	J R奈良線北側 舟入推定地（南東から）	11
図13	舟入西側石垣〔宮内庁管轄地〕（北東から）	11
図14	舟入西側石垣刻印部分（東から）	11

表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	遺物概要表	8

伏見城跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

本調査は、JR奈良線桃山・六地藏間路盤新設工事に伴う発掘調査である。

調査地は京都市伏見区桃山町伊庭地内で、伏見城跡にあたる。このため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）は、西日本旅客鉄道株式会社に対し、発掘調査実施の指導を行った。これを受け、西日本旅客鉄道株式会社から事業を請け負った西松建設株式会社は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に発掘調査を委託した。調査は、文化財保護課指導の元に、当研究所が実施した。

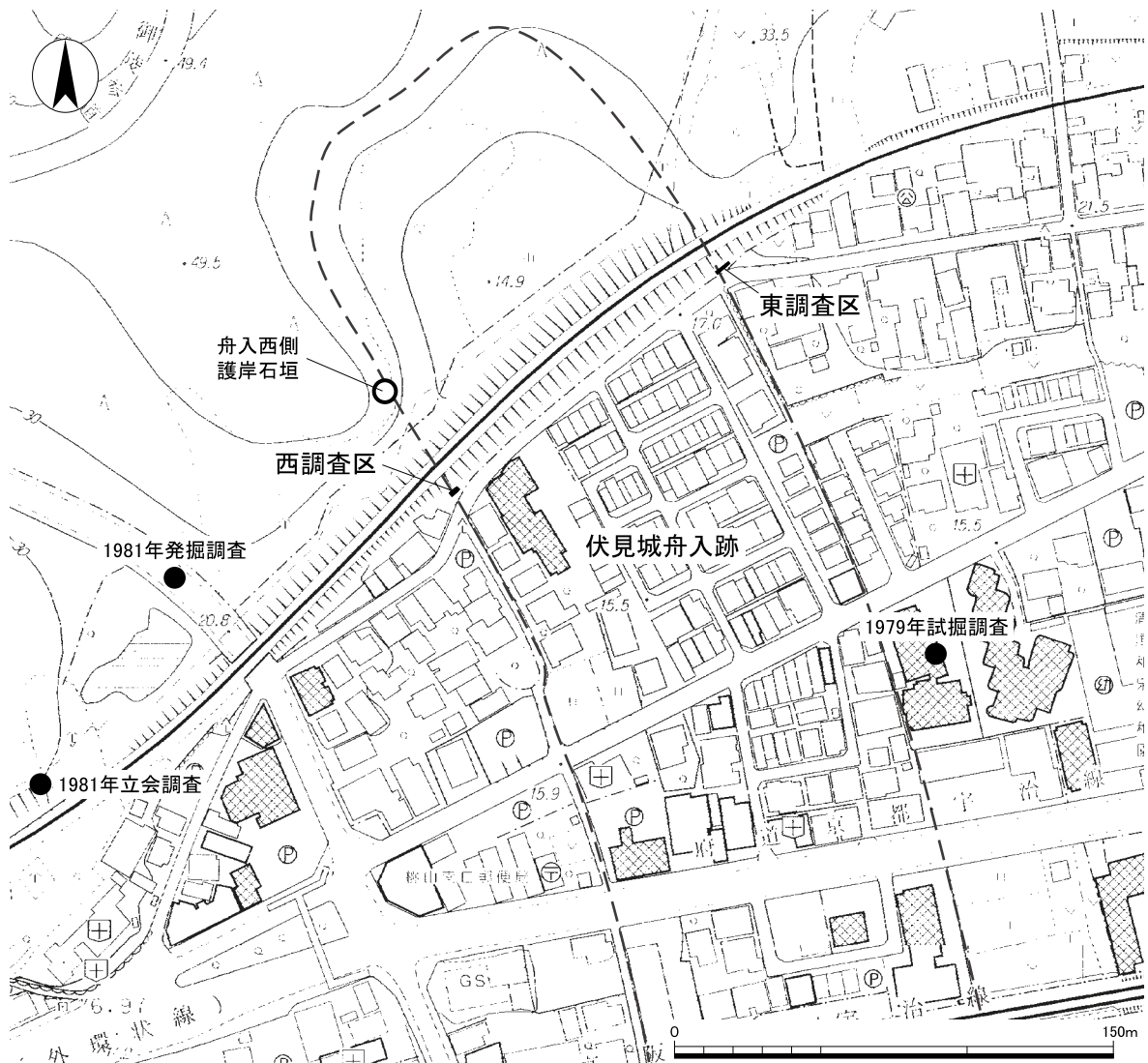


図1 調査位置図 (1 : 2,500)

(2) 調査の経過

発掘調査の目的は、既往の調査成果及び文献史料などから考えられる、伏見城跡に関する遺構の確認と、当地の歴史の変遷を明らかにすることである。特に、現地地形・絵図などから、当調査地は木幡山伏見城の舟入に推定され、これに関係した遺構の確認を主目的とした。

発掘調査は、東調査区を2019年4月22日～23日、西調査区を11月18日～19日に実施した。

東調査区は、舟入東端推定地に設定した。調査区は、東西方向の長方形（南北1m・東西5.5m）である。地表下約1.5mまで重機掘削し、その後、人力掘削により調査を実施した。調査では、遺構面を検出し遺構調査を行った後、写真撮影及び平面・断面実測を実施し、記録作業を行った。

西調査区は、舟入西端推定地に設定した。調査区は東西方向の長方形（南北1.5m・東西3.5m）である。地表下約0.8mまで重機掘削を行ったところ湧水があり、中央部のみをさらに約0.8m掘削を行ったが、北側壁の崩落の危険が認められたため、重機掘削を止めた。そのため遺構は検出できなかったが、写真撮影及び平面・断面実測を実施し、記録作業を行った。11月19日にすべての作業を終了した。



図2 東調査区調査前全景（南西から）



図3 東調査区調査状況（北東から）



図4 西調査区調査前全景（北東から）



図5 西調査区調査状況（南西から）



図6 東調査区配置図 (1:200)

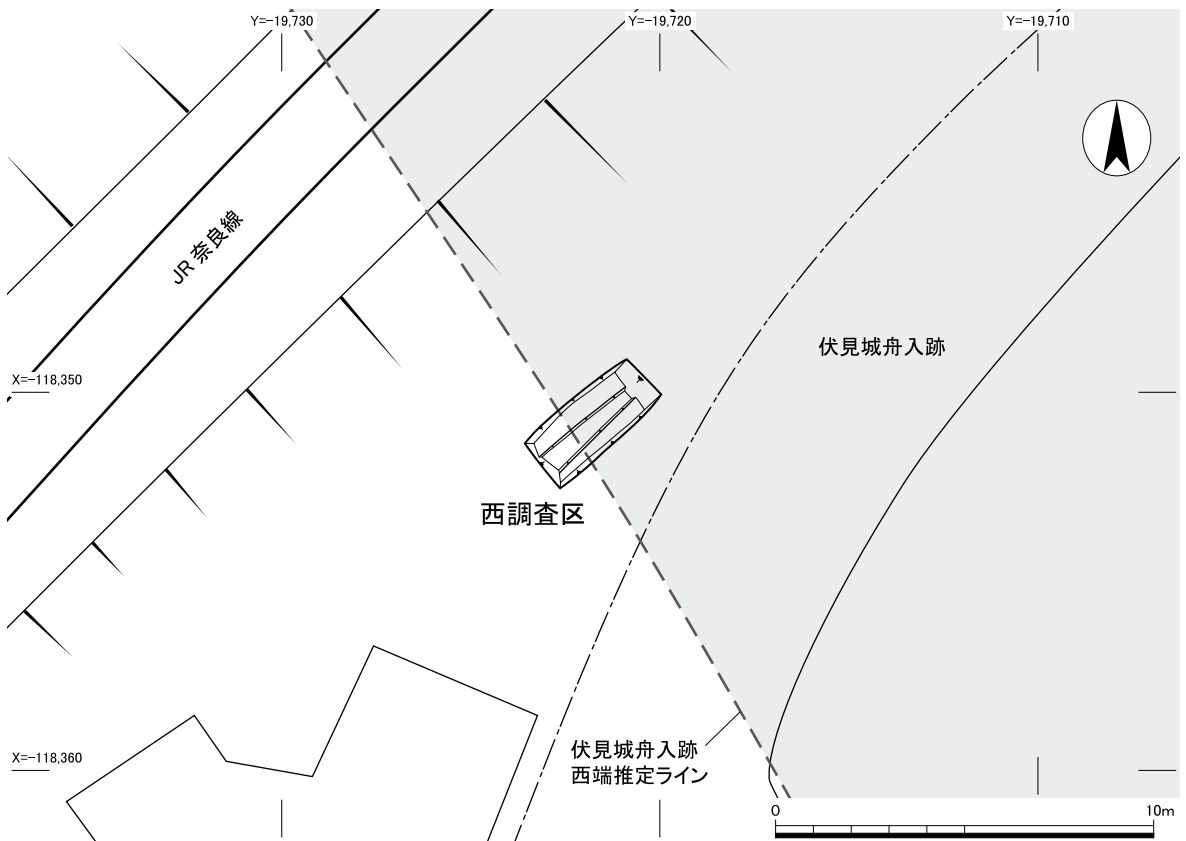


図7 西調査区配置図 (1:200)

2. 位置と環境

(1) 調査地の環境

地理的環境

調査地北側に位置する桃山丘陵（木幡山）は、南北約3km・東西約2kmの範囲を占め、標高は100mである。丘陵の南側は、急峻な傾斜地となっている。調査地は、傾斜地から平坦地に変わる傾斜変換点に位置する。調査地南側は、傾斜変換点から宇治川までの約250～300mの間が平坦面となり、南側に緩やかに下がる。

傾斜変換点は、現JR奈良線により若干改変されているものの、路線の築堤は基本的に盛土で構成されているため、旧地形を良く留めている。調査地北側の傾斜地には、東西幅約100m、南北長さ約50mの窪地が残存し、窪地西側には東西幅約50mの丘陵が北西から南東に延びる。

歴史的環境

伏見城は四時期に分けて考えられている¹⁾。一期は豊臣期指月屋敷〔文禄元年（1592）～文禄3年（1594）〕、二期は豊臣期指月城〔文禄3年（1594）～慶長元年（1596）〕、三期は豊臣期木幡山城〔慶長元年（1596）～慶長5年（1600）〕、四期は徳川期木幡山城〔慶長5年（1600）～元和9年（1623）〕である。

本調査地は、この三期・四期の木幡山伏見城の南辺に当たる。南辺中央には舟入が位置し、その両側には武家屋敷が展開していた。また、それらの南側には東西方向の道路が位置したと推定される。

(2) 既往の調査

伏見城跡では、これまで数多くの発掘調査および試掘調査・立会調査が実施された。ただ、調査は城の北側と西側に集中し、東側と南側は数少ない。

東調査区南側の1979年試掘調査では、地表下約3mで黒灰色泥土を検出し、上面で石積遺構を検出した。その下層は青灰色粘土の堆積である。当該地は、伏見城期の池か湿地と推定された²⁾。

調査地西側の1981年発掘調査では、桃山86号線道路で5箇所³⁾の調査区を設定し、近・現代の遺構を検出した。同JR奈良線北側の立会調査では、遺構・遺物は検出していない。

註

- 1) 山田邦和「伏見城とその城下町の復元」『豊臣秀吉と京都－聚楽第・御土居と伏見城－』文理閣 2001年
- 2) 長宗繁一「伏見城跡 伏見城跡試掘調査（No.154）」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告 昭和54年度』京都市文化観光局文化財保護課 1980年
- 3) 「伏見城1」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年

3. 遺 構

(1) 東調査区 (図8、図版1)

層序

調査地の現地地表は、東から西に低くなり、標高は18.4mから17.8mである。

基本層序は、地表面から0.4mまでが現代盛土で、第1層はにぶい黄褐色泥砂を中心とする層(厚さ0.2~0.35m)である。

第2層以下は東から西へ傾斜する整地層で、厚さは一定していない。第2層は、にぶい黄褐色砂泥を中心とする層(厚さ0.1~0.25m)で、西側に向けて厚くなる。第3層は、褐色砂泥を中心とする層(厚さ0.1~0.8m)で、西側に向けて厚くなる。第4層は、にぶい黄褐色砂泥と灰黄褐色泥砂を中心とする層(厚さ0.1~1.1m)で、西側に向けて薄くなる。第2~4層は、東側から西側に傾斜する堆積状況を呈する。第2・3層は無遺物で、第4層は瓦・土師器・陶器小片を少量含む。時期は江戸時代に属する。

その下の第5層は、にぶい黄褐色砂礫層(φ0.5~7cmの礫多く含む)で、締まりの強い層であ

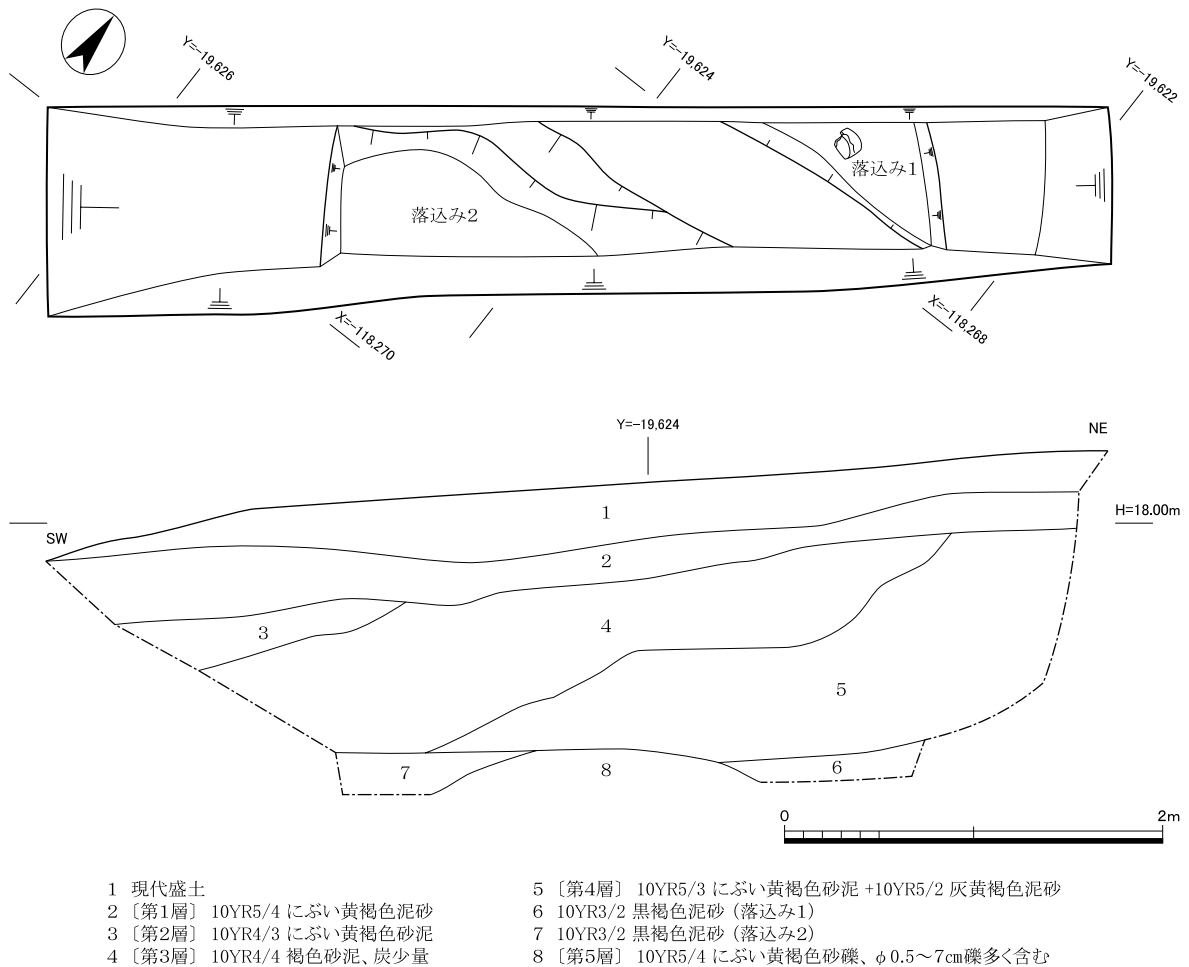


図8 東調査区遺構実測図 (1:40)

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代	落込み1・2	

る。第5層上面の標高は16.8mである。

第5層以下は、壁面崩壊の危険があるため、安全上の理由から掘削できず、地山は確認できなかった。

遺構

第5層上面で江戸時代の遺構を検出した。遺構には落込み1・落込み2がある。

落込み1 調査区北東側で検出し、北側・東側・西側は調査区外で、平面形は不明である。南壁は緩やかに傾斜する。深さは0.2m以上である。埋土は黒褐色砂泥で、平瓦、陶器鉢、染付椀が出土した。遺物の時期は江戸時代に属する。

落込み2 調査区南西側で検出し、南側・東側・西側は調査区外で、平面形は不明である。北壁は緩やかに傾斜する。深さは0.2m以上である。埋土は黒褐色砂泥で、平瓦、瓦質土器鉢、陶器搗鉢、施釉陶器椀・鉢、染付椀が出土した。時期は江戸時代に属する。

(2) 西調査区 (図9、図版2)

層序

調査地の現地表は西から東に低くなり、標高は18.8mから18.6mである。

基本層序は、地表面から0.1～0.2mまでが現代盛土である。

第1～4層は整地層で、厚さは一定していない。第1層は、黄褐色泥砂を中心とする層(厚さ0.1～0.25m)である。第2層は、灰白色砂礫を中心とする層(厚さ0.1～0.2m)である。第3層は、明黄褐色砂泥を中心とする層(厚さ0.1～0.15m)である。第4層は、にぶい赤褐色砂泥(厚さ0.1m)である。第3層はレンガを含み、他の層は無遺物である。

第5層以下は、ほぼ平行した堆積状況を呈し、厚さもほぼ一定である。第5層は、灰色砂泥を中心とする層(厚さ0.05m)である。第6層は、灰黄褐色砂泥と灰色泥砂を中心とする層(厚さ0.2m)である。第7層は、灰色粘土を中心とする層(厚さ0.15～0.25m)である。第8層は、灰白色シルトを中心とする層(厚さ0.2m以上)である。第5層は瓦片と弥生土器片を少量含む。時期は江戸時代に属する。第6～8層は無遺物である。

第5層上面の標高は17.8m、第8層上面の標高は17.4mである。

第8層以下は、湧水・壁面崩壊の危険性など安全上の理由から掘削できず、遺構・地山とも確認できなかった。

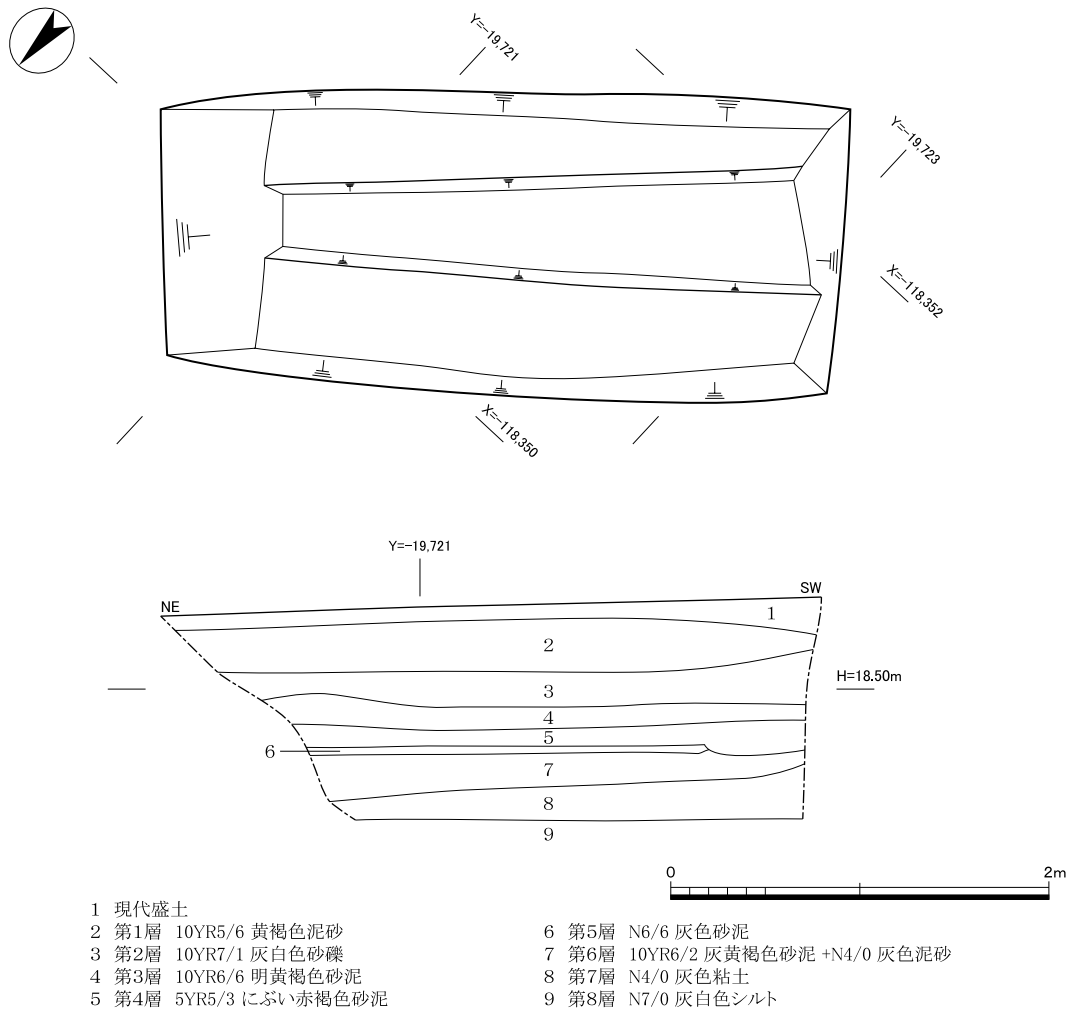


図9 西調査区遺構実測図 (1 : 40)

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は桃山時代の瓦、江戸時代の瓦類・土器類が整理箱に2箱出土した。

(2) 瓦類 (図10)

1は平瓦である。凹面は布目、端面付近はナデ。凸面は不定方向ナデ。側面は縦ケズリののち縦ナデ。端面はヨコナデ。灰色 (N6/0)。硬質。西調査区第5層から出土した。

(3) 土器類 (図10)

2は陶器鉢である。平面坦な底部から、体部は丸く立ち上がる。底部外面は圧痕、内面は丁寧なナデ。体部内外面は横ナデ、外面下部は横ケズリ。底部内面・体部内面・体部上半は長石釉を施す。素地灰色 (2.5Y8/2)。硬質。東調査区落込み2から出土した。

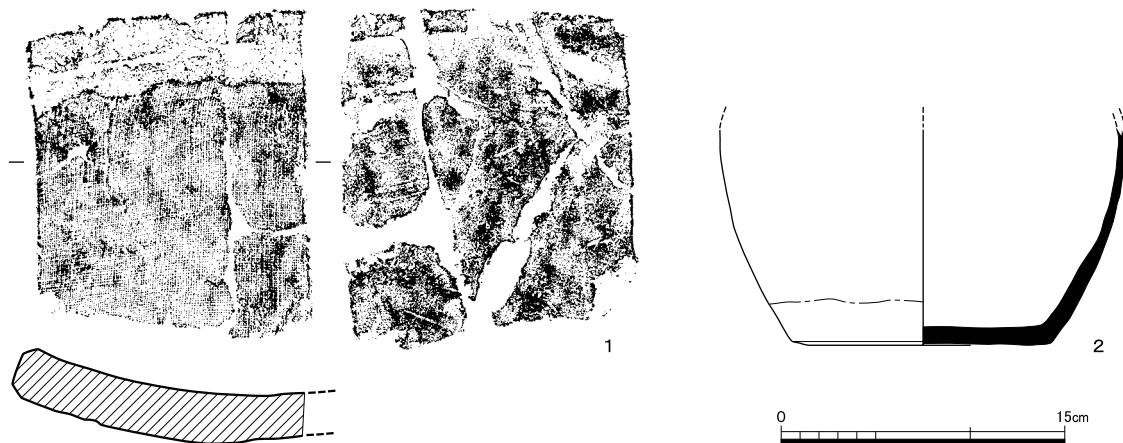


図10 出土遺物拓影及び実測図 (1 : 4)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
桃山時代	瓦		平瓦1点		
江戸時代	陶器、磁器、瓦		陶器1点		
合計		3箱	2点 (1箱)	0箱	2箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

5. まとめ

(1) 検出遺構について

今回の調査では、東調査区・西調査区で共に舟入に関連した遺構は検出できなかった。

西調査区では、地表下0.8m以下で粘土と砂泥の互層の堆積を確認し、上面で桃山時代の平瓦が出土した。さらに調査区南側では、西から東へ下がる南北方向の段差(約0.5m)が残存している。

以上のことから、本調査で検出した堆積層は舟入内の堆積の可能性が高い。したがって、舟入護岸石垣は西調査区よりさらに西側に推定できる。

東調査区では、西調査区で見られたような粘土・砂泥の互層堆積を検出できなかった。

(2) 木幡山伏見城舟入について

『伏見御城郭并屋敷取之繪圖』〔天明8年(1788)・京都市歴史資料館所蔵〕は、伏見城三期・四期の状況を示す(図11)。この絵図には、本丸南東側の山里丸(四期には百軒長屋となる)と宇治川の間には舟入が描かれる。舟入の北部には、突堤状の船着き場が配置される。舟入両側には並木が見られ、南北途中には東西方向の橋が設けられる。舟入は宇治川に接続し、前面には養齊島が位置する。舟入の西側には、北西から南に伸びる御茶屋山が位置する。

本調査区周辺の現地地形は、北側丘陵(山里丸推定地)と、JR奈良線築堤との間に南北方向の窪地が残存する。規模は、東西幅約100m、南北長さ約70mである。この窪地が舟入の遺構と推定される(図12)。窪地西側の宮内庁管轄地内には、一辺1m前後の自然石を2・3段積み重ねた石垣が残存する(図13)。石の表面には「田」の刻印がみられるものがある(図14)。この石垣が舟入西側の護岸石垣と推定できる。加藤次郎氏の論考によると、1953年の時点では、舟入は水田となり、北傾斜地には3箇所段地が確認される。

JR奈良線南側では、北側窪地の南延長上において、京阪電鉄宇治線・宇治川までの間に道路・宅地区画境の段差(0.1~1.5m)から舟入遺構の痕跡が確認できる。規模は、東西幅約110m・南北長さ約250mである。1979年試掘調査で検出した石積遺構は、舟入東護岸にあたる。

今回の調査では、木幡山伏見城舟入の護岸は検出できなかったものの、舟入の埋設過程を考える上で重要な手掛かりとなった。

謝辞 『伏見御城郭并屋敷取之繪圖』は、京都市歴史資料館の許可を得て掲載した。記して感謝いたします。

参考文献

加藤治郎『伏見桃山の文化史』1953年、(私家版)

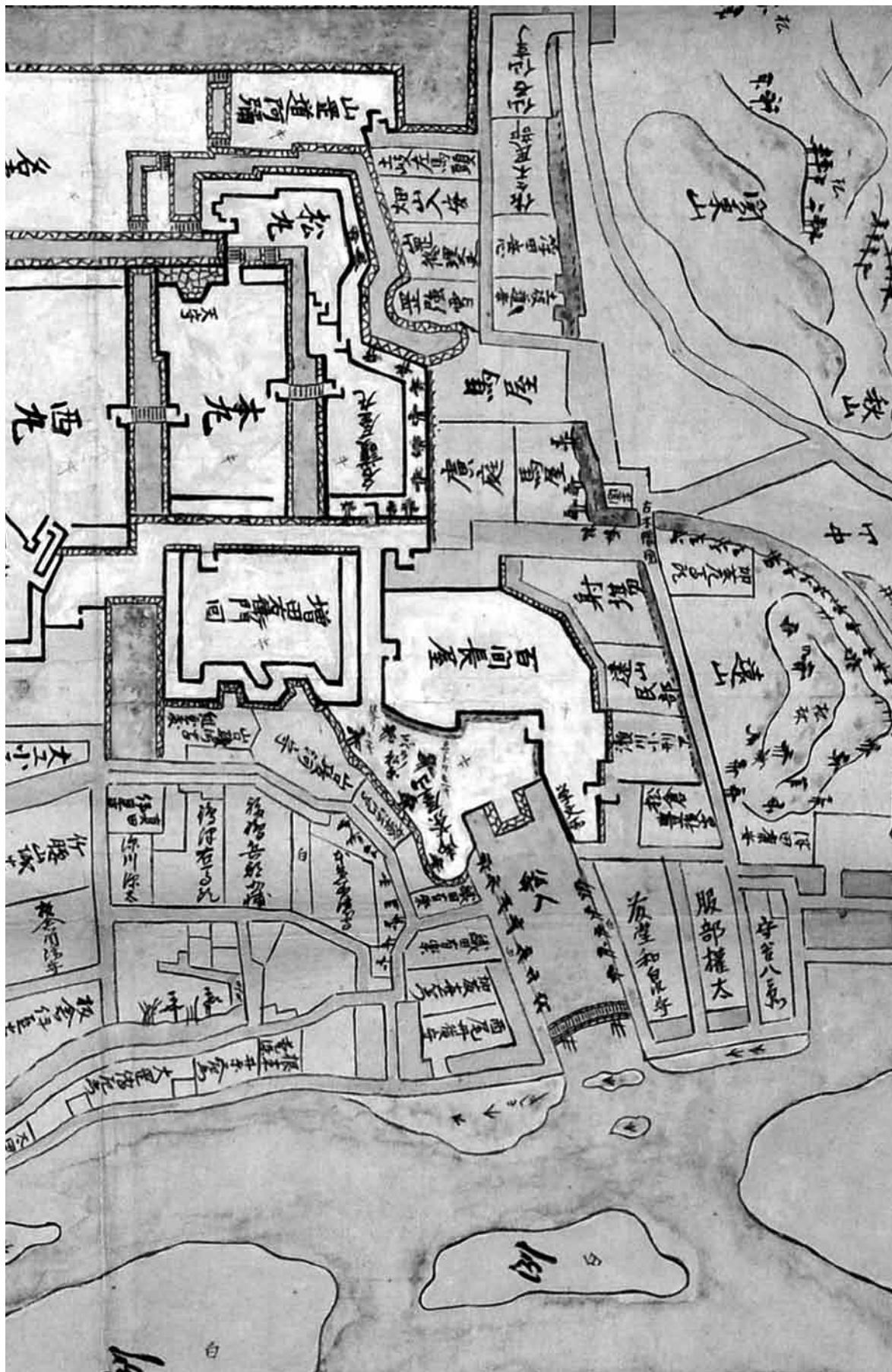


图11 『伏見城御城郭并屋敷取之繪圖』〔京都市歴史資料館蔵〕（部分）



図12 JR奈良線北側 舟入推定地（南東から）



図13 舟入西側石垣〔宮内庁管轄地〕（北東から）



図14 舟入西側石垣刻印部分（東から）

圖 版



1 東調査区全景（東から）



2 東調査区北西壁断面（南東から）



1 西調査区全景（北から）



2 西調査区南東壁断面（北西から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふしみじょうあと							
書名	伏見城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2019-9							
編著者名	上村和直							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2020年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふしみじょうあと 伏見城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 ももやまちょういば 桃山町伊庭 ちない 地内	26100	1172	34度 56分 02秒	135度 47分 07秒	2019年4月 22日～2019 年4月23日 2019年11月 19日～2019 年11月20日	東調査区 5.5㎡ 西調査区 5.25㎡	JR奈良線 路盤新設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
伏見城跡	平城跡	桃山時代		瓦		壁面崩壊や湧水により掘削深度が1.5mで留まり、舟入の石垣は確認できなかった。		
		江戸時代	落込み	陶器、磁器、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-9

伏見城跡

発行日 2020年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961